

尾道の刀工「三原正廣」について。

尾道から福山にかけては、南北朝時代から室町末期に、いわゆる「三原(みわら)鍛冶」が栄えたことで知られています。南北朝時代の作品は「古三原」、室町時代初期から中期にかけての作品は「中三原」、室町末期から戦国時代にかけての作品は「末三原」と呼ばれます。現在、古い鍛冶場跡が確認されているのは、尾道市と福山市を中心に、地頭分、市原、木梨、梶山田、鍛冶屋、芦田、草木、駅家、加茂、井原、矢掛など、両市周辺の各町に展開しています。



古くから出雲や備前に近接して、良質な砂鉄が手に入りやすかったためか、刀工集団が大和から尾道へ移住し、その作刀技術は大和伝*1 を踏襲しています。鎬筋(しのぎすじ)*2 が高く、地肌は柾目(まさめ)に板目肌*3 が混じり、刃紋は直刃(すぐは)や湾(のた)れが多く、相州伝*4 の影響から刃縁(はぶち)が鉷(にえ)気味になるのが特長です。その後、尾道周辺でもタタラ(砂鉄を溶かして鋼を精製する技術)が操業を始めたらしく、「古三原」とは異なる地鉄が見られるようになります。

もっとも良質な作品は「古三原」に多く、国宝や重要文化財に指定されている正家・正廣・正重などが著名です。「中三原」の作品は、徐々に大和伝の作風を脱して、万人好みの無難な姿へと変わっていきます。当時の中国(明)でも日本刀の人気が高まり、三原鍛冶の作だけで16万振りもが輸出されたと伝えられています。「末三原」の作品は、尾道や福山ではなく、小早川家が封入された三原(みはら)村周辺を中心に栄えました。戦国時代を迎えて刀の需要が急激に高まり、「末三原」は数打ち(粗製濫造)の作品ばかりになってしまい、美術的価値はあまりありません。

掲載している「備州住正廣」*5は、尾道に住した三原鍛冶の中でも、もっとも高名な刀工のひとりです。初代「正廣」は、南北朝の貞治(正平)年間ごろに活躍した人(古三原)で、二代「正廣」が室町初期の応永年間ごろ、三代が室町中期の天文年間ごろに作品を残しています。五代(永正年間ごろ)までの活躍が確認されており、この「備州住正廣」は二代または三代の作と思われます。

彦根の伊井家または藩士の家に代々伝わり、瑕や研ぎ減りも少なく、600年前の作品とは思えないほど健全な状態を保っています。大切にされていたらしく、江戸時代に江戸表への参勤または屋敷詰め用に造られたと思われる、質実剛健で地味な拵え(こしらえ = 刀の外装)*6も付属しています。

*1:大和(奈良)地方の東大寺や興福寺など、寺院の僧兵が武装するために栄えた独特な刀工集団の鍛え方です。

*2:刀のまん中に縦に入る筋のこと。この筋の入った刀のフォルムを、鑄造(しのぎづくり)と呼びます。

*3:刀の鍛え肌は、板を削ったときに見られる木肌に似ているため、木目用語で呼ばれることがあります。板目肌、柂目肌、空目(もくめ)肌、綾杉(あやすぎ)肌、松皮(まつかわ)肌などが有名です。

*4:相模(神奈川)の鎌倉を中心に栄えた、豪壮な作刀技術。蒙古襲来などの経験を経て、斬れ味や強度を最高レベルにまで高め、相州伝は日本刀の理想的な完成形を実現した鍛錬法で、全国の刀鍛冶に圧倒的な影響を与えました。代表刀工に、国光・行光・正宗・貞宗などがあります。室町時代から現代にいたるまで、鎌倉鍛冶が到達した技術水準を超える作品は、いまだ産まれていません。

*5:正廣の銘の切り方は、「備州住正廣」(初代・二代・三代)のほか「正廣作」(初代・二代)、「備州尾道住正廣」、「(表)備後国正廣作・(裏)尾道住」、「(表)備州住正廣作・(裏)尾道住」(各二代)、「備後国三原正廣」、「備州三原貞正廣」(各三代)などがあります。三原(みわら)は、現三原市の地名ではなく、当初は刀工集団の苗字ないしは銘字だったことがうかがわれます。

*6:幕府は、刀の拵えが年々華美になるのを嫌い、千代田城へ登城する際の拵えを規定して、柄糸や下げ緒の色、鞘(さや)の漆塗りにいたるまで質実地味なデザインにするよう奨励しています。この正廣の拵えは、当時、江戸の大名屋敷で暮らしていた武士たち指料の、代表的なデザインです。

備州住正廣

長さ:1尺7寸6分 反り:2分 茎穴:1個

時代:室町時代初期~中期(応永から永正年間ごろ)

登録:滋賀県教育委員会 文化財保護課

拵え:青柄糸巻黒呂塗鞘拵(あおつかいとまきくろぬりざやこしらえ)

刀の専門用語で解説しますと...(^^);

地肌は板目よく練れ、刃寄り平地(ひらじ)に柂目強く出て大和伝の面影を強く残す。微かに肌立ちところに地鉄よく練れ、霜降りのような地鍔(ちにえ)が美しい。波紋は中直(なかすく)でやや湾れ、刃縁はしまり諸所小鍔ついて、二重・鼠足・銀筋・打ちのけ・砂流し・喰い違い・湯走り・葉(よう)・稲妻等を見せ、刃中明るく働き極めて盛ん。帽子は直焼きのまま入り、先は火焰風に掃きかけ返りやや深し。茎(なかご)は生ぶで鑢目は筋違い、茎尻は入山形で三原鍛冶の特質をよく残す。

